

# 宇治拾遺物語における希望表現について

柴田 昭二  
連 仲 友

## 目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

### 一、はじめに

本稿は、別稿<sup>1)</sup>を受け、宇治拾遺物語を研究資料として、それにおける希望表現<sup>2)</sup>の実態を説明しようとするものである。

宇治拾遺物語は、『日本古典文学大辞典』<sup>3)</sup>などによると、編者未詳、その成立については諸説あるが、通説として、一二一〇年代を中軸に、十三世紀前半の成立とみられる。総計一九七話が類別せずに収載されているが、「今昔物語集」「打聞集」「江談抄」などの類話が数多く含まれ、その他直接的な口誦採録によるものなど全編を通じて会話を多く盛り込んだ語り口調が特徴である。

写本に、宮内庁書陵部・桃園文庫・蓬左文庫・陽明文庫・九州大学竜門文庫・内閣文庫、その他に十数部の完本・零本があり、版本に寛永頃

宇治拾遺物語における希望表現について

の古活字本・万治二(1659)年の整版本などがある。テキストには、岩波書店刊新日本古典文学大系『宇治拾遺物語』<sup>4)</sup>を用いる。その底本は陽明文庫本である。

### 二、希望表現の構成形式

宇治拾遺物語における希望表現と認められる構成形式及びそれぞれのとおよその用例数は以下の通りである。

「欲」	(五例)
「ムト思フ」	(七六例)
「ホシ」	(一四例)
「願」	(一一例)
「望」	(三例)
「祈」	(四四例)
「乞」	(一七例)
「請」	(一一例)
「求」	(二二例)

- 「詭」 (二例)  
「バヤ」 (一七例)  
「モガナ」 (二例)  
「マホシ」 (四例)

宇治拾遺物語における希望表現の構成は名詞・形容詞・動詞形式、慣用形式及び終助詞・助動詞形式に広く分布している。即ち、名詞形式は「欲」「願」、形容詞形式は「ホシ」、動詞形式は「望」「祈」「乞」「請」「求」「詭」、慣用形式は「ムト思フ」「願ハクハク給へ」、終助詞形式は「バヤ」「モガナ」、助動詞形式は「マホシ」が見られる。各形式の具体的用法についての考察は次節に譲るが、量的には「ムト思フ」が際立って目立つ存在である。

### 三、各形式の用法

#### 1、「欲」の用法

まず、漢字表記形式の「欲」の用例を見る。

漢字表記の「欲」は五例見られる。その用法には漢文部分における助動詞用法と和文部分における名詞用法が見られる。

- (1) 竜門聖鹿ニ欲替事(上七 三頁)  
(2) 季通欲逢事(上二七 三頁)  
(3) 明衡欲逢殃事(上二九 三頁)

例(1)(2)(3)は漢文部分における用例であり、いずれも説話の目録に題目として用いられている。その表記法は漢文により、「ムトオモフ」と訓読されよう。この「欲」は漢文の語法で見れば動詞を下接す

る助動詞用法であり、何かしたい、ありたいという意の「希望表現」と、今から行動する意の「将然表現」と両方に解される。すでに前稿<sup>(5)</sup>で指摘したように、このような有情物を主語とする場合、純粹な自然現象を表す無情物の「将然」と異なり、「希望」の意味合いを含み持つ。ここでは、これらの例を希望表現と見て、希望表現の低位分類における「願望」<sup>(6)</sup>の「説明」<sup>(7)</sup>の用例とする。

(4) 此女房を見て、欲心を起こして、たちまち病となりて、すでに死なんとするあいだ、(上六〇 一二三頁)

(5) 「彼男は欲にふけりて恩を忘たり。」(上九二 一七六頁)

例(4)(5)は和文脈における用例であり、「愛欲の心」「欲望」という意で、「欲」の名詞用法である。

#### 2、「ムト思フ」の用法

「ムト思フ」の用例は七六例見られる。

前述した「欲」の用法と関連性があり、本来「ムトオモフ」は「欲」字に対応する訓読法の一つでもある。漢文における助動詞用法の「欲」字は「〜したい」という意を表す希望表現と「〜しようとする」という意を表す将然表現の用法があり、訓読法として「ムトオモフ」「トス」「ムトホッス」が最も一般的で、その内「ムトオモフ」は専ら希望表現を表すものである。しかし、宇治拾遺物語における「ムト思フ」形式は和文脈に用いられたものであり、漢文訓読と無関係に使われていることをまず指摘しておきたい。

(6) 「汝をたすけんとおもふ也。はやく故郷に帰て、罪を懺悔すべし」

との給ふ。(上四四 九〇頁)

(7)「この白髪のすこし残りたるを剃て、御弟子にならんと思ふ也」

(下一三六 二九〇頁)

例(6)は、「あなたを助けたい。」の意、例(7)は「弟子になりたい。」の意と解され、いずれも自己の「願望」を「表出」<sup>(8)</sup>するものである。

(8)「もし習はんとおぼしめさば、此度は大やけの御使なり。」

(下一〇六 二一九頁)

(9)「汝、宝を得んと思はば、たゞ実の心をおこすべし。」

(下一五四 三〇九頁)

例(8)は、「もし習いたいのならば、」の意、例(9)は、「宝を得たいのならば、」の意と解され、いずれも二人称の仮定形で相手の「願望」を「説明」するものである。

(10)「いつしか我力付て、清まはりて、心清く四巻経書供養し奉んと思けり。(上一〇二 二〇七頁)

(11)此僧に具して、山寺などへ往なんと思ふ心つきぬ。

(下一二三 二六五頁)

例(10)は、「心清く四巻書供養をしたかった。」の意、例(11)は、「山寺などへ行きたい思いが」の意と解され、いずれも地の文において三人称の「願望」を「説明」するものである。

(12)東大寺といふ所にて受戒せんと思て、とかくしてのぼりて、受戒してけり。(上一〇一 一九六頁)

(13)「その事申さんと思て、参りつる也」といふ。

(下一九七 三九五頁)

例(12)は、「東大寺で受戒したくて、」の意、例(13)は、「その事を申し上げたくて、」の意と解され、いずれも「ししたくて」の構文で、これらの例は「願望」の「説明」と見なすことが可能であるが、行動を伴うことにより「将然」の意味合いが感じられる。

### 3、「ホシ」の用法

宇治拾遺物語に「ホシ」は一四例見られる。その内「ホシ」は一例見られ、「ホシガル」が三例見られる。

(14)おのれ、物のほしければ、人にも見せず、隠して食ふほどに、

(上一八五 一五六頁)

(15)水ほしき時は、水瓶を飛ばして、汲にやりて飲みけり。

(下一七三 三四三頁)

(16)「然に、うけ給はれば、心の欲しきまゝに、悪しき事をのみ事とするは、当時は心になふやうなれども、終悪しき物也。」

(下一九七 三九五頁)

例(14)は、「ものがほしかったので、」の意、例(15)は、「水がほしい時には、」の意と解され、具体的に何かを手に入れたという心情を表

すもので、「願望」の「説明」に当たる用法である。例(16)は、「心の欲するままに、」の意と解され、具体的に何かが欲しいのでなく、「思う通りに、きままに、」という一般化された用法である。

(17)「物をほしがりつれば、かやうの所には、食ひ物、ちろぼうものぞかしとて、まうで来つる也。」(上五三 一〇九頁)

(18)「よろづの人のほしがりて、あたひも限らず買んと申つるをも惜しみて、」(上九六 一八八頁)

例(17)(18)は、「物を欲しがる」の意と解され、内心の希望が外に現れた行動を表す用例である。

#### 4、「願」の用法

宇治拾遺物語に「願」は一一例見られる。その内名詞「願」は七例、動詞「願フ」は二例、慣用形式の「願ハクハク給へ」は二例見られる。これらの例はすべて仏教関係の説話に用いられている。

(19)「四巻経、書奉らんといふ願をおこせ」とみそかにいへば、  
(上一〇二 二〇五頁)

(20)「爰に本願の上皇、めしとめて、大会の講師とす。」  
(上一〇三 二〇九頁)

例(19)(20)における「願」「本願」は仏教用語で、「願」の名詞用法である。

(21)極楽に生れん事をなんねがひける。(上五五 一一一頁)

(22)ひとへに極楽をねがふ。(上七三 一三四頁)

例(21)(22)は仮名表記され、動詞用法である。

(23)「願はくは許し給へ。」(上一五八 三一七頁)

(24)「願はくは、我命を許し給へ」といふと見つ。

(下一六七 三三二頁)

例(23)(24)は慣用形式の用法で、「許してください」「命を許してください」の意と解され、話し手の「希求」<sup>⑨</sup>を直接「表出」する用法である。

#### 5、「望」の用法

宇治拾遺物語に「望」は三例見られる。その内名詞用法は一例、実動詞用法は二例であり、助動詞用法は見られない。

(25)「たゞ、しかるべき居所をしめて、一生を送られん、これ今生の望なり。」(上九〇 一六七頁)

例(25)は、「このことが今生の希望である。」の意と解され、名詞用法である。

(26)除目のあらんととも、先、国のあまたあきたる、望む人あるをも、  
国のほどにあてつ、(下二二〇 二五六頁)

(27)「その人は道理たてて望とも、えならじ」など、  
(下二二〇 二五七頁)

例(26) (27)は、「望む人」「望んでも」の意と解され、ともに動詞用法である。

## 6、「祈」の用法

宇治拾遺物語に「祈」は四四例見られる。その内名詞用法は一五例、実動詞用法は二九例見られるが、助動詞用法は見られない。なお、「祈」の用例はすべて仏教関係の説話に用いられている。

(28)東大寺の法蔵僧都は、此左大将の御祈の師なり。  
(下一八三 三六四頁)

(29)されば、人の祈は僧の浄不浄にはよらぬ事也。  
(下一九一 三八三頁)

(30)「母の尼して、祈をばすべし」と、(下一九一 三八三頁)

例(28) (29) (30)は仏教用語で、「祈」の名詞用法である。

(31)静観僧正祈雨法験之事(上一二〇 三頁)

(32)同僧正大嶽ノ岩祈失事(上一二一 三頁)

(33)山伏船祈返事(上三六 三頁)

例(31) (32) (33)は目録の漢文における用例である。「雨を祈る」「祈つて岩がなくなる」「祈つて船が帰る」の意と解され、「祈」の実動詞用法である。

(34)「座をたちて、別に壁の本にたちて、祈れ。」(上一二〇 四三頁)

(35)晴明が見付て、夜一夜、祈たりければ、そのふせける陰陽師のもとより、人の来て、(上一二六 五七頁)

(36)雨降るべきよし、いみじく祈給けり。(上九七 一九一〇頁)

例(34) (35) (36)は和文における用例である。すべて「祈る」の意で、普通の実動詞用法である。

(37)額に香炉をあてて、祈誓し給こと、見る人さへくるしく思けり。  
(上一二〇 四三頁)

(38)「我山の三宝、助け給へ」と手をすりて祈請し給に、大なる犬一疋出で来て、(下一七〇 三三九頁)

(39)日本の方に向て、祈念して云、「我国の三宝、神祇助け給へ。恥見せ給な」(下一七二 三四二頁)

例(37) (38) (39)における「祈誓す」「祈請す」「祈念す」は複合動詞形式で、これらも実動詞用法である。

## 7、「乞」の用法

宇治拾遺物語に「乞」は一七例見られる。その内名詞用法は一例、実動詞用法は一六例見られる。

(40) 乞食といふ事しけるに、ある家に、食物えもいはずして、庭に置をしきて、物を食はせければ、(上五九 一二二頁)

例(40)における熟語「乞食」は、仏教で説かれる十二頭陀行の一人で、人家の門口に立ち、食物を乞い求める托鉢のことをいう。これは名詞用法である。

(41) 人をはかりて、物を乞はんとしたりけるなり。(上六 一七頁)

(42) 「それに、その金をこひて、堪へがたからん折は、売りて過ぎよ」と申しかば、(上八 二〇頁)

(43) ある人のもとに、なま女房の有けるが、人に紙乞ひて、(上七六 一三九頁)

例(41)(42)(43)における「乞」を乞ふはいずれも具体的な物を求めるという意で、実動詞用法である。

(44) そのとらへたる人を見知りたれば、乞ひ許してやり給。

(下一五七 三一五頁)

(45) はじめの法師も、事よろしくは、乞ひ許さんとて、

(下一五七 三二頁)

例(44)(45)は、「頼んで許してもらおうようになさった。」「許しを乞ふ」の意で、具体的な物を求めるのではないが、やはり実動詞の用法である。

## 8、「請」の用法

宇治拾遺物語に「請」は一一例見られる。その内名詞用法は二例、実動詞用法は九例見られるが、助動詞用法は見られない。

(46) 公請つとめて、在京のあひだ、ひさしくなりて、魚を食はで、(上六七 一二八頁)

例(46)における「公請」は熟語で、僧侶が朝廷から法会や講義に召されること。これは名詞用法である。

(47) 此僧正を請じたてまつりて、(上六九 一三〇頁)

(48) 仲胤僧都を山の大家、日吉の二宮にて法花経を供養しける導師に請じたりけり。(上八〇 一四八頁)

(49) 戸を開けて請ぜられければ、飛入て前に居給ぬ。

(下一〇五 一二五頁)

例(47)(48)(49)における「請ず」は「招待する」「招く」の意で、実動詞用法である。

(50) 「かくさいなめば、今よりながく起請す。」(下一二四 二六六頁)

(51) 「もし、かく起請して後、青常の君と呼びたらんものをば、酒、果物など取りいださせて、あがひせん」といひかためて、  
(下二二四 二六七頁)

(52) 「かく起請を破りつるは、いと便なき事なり」とて、

(下二二四 二六七頁)

例(50) (51)における「起請す」は神仏に誓いを立てて約束する意で複合語としての実動詞用法で、例(52)の「起請」は名詞用法である。

## 9、「詭」の用法

宇治拾遺物語に「詭」は二例見られる。

(53) 仮名曆詭タル事(上七六 四頁)

(54) 主にもこひ、知りたる人にも物こひ取りて、講師の前、人にあつらへさせなどして、(下一〇九 二二三二頁)

例(53)は題目における漢字表記の用例で「仮名を用いた曆を詭えた」の意、例(54)は仮名表記の用例で「人に詭えさせる」の意と解され、いずれも実動詞用法である。

## 10、「求」の用法

宇治拾遺物語に「求」は一二例見られる。その内名詞用法は一例、実動詞用法は一一例見られる。

(55) 随求<sup>ずいぐ</sup>ダラニ籠<sup>かご</sup>額法師事(上五)

例(55)は題目における漢文の用例である。「随求」は仏教用語で、求めるところに随って直ちに福徳を得させるとするダラニのことをいう。これは名詞用法である。

(56) 山に入て、茸をもとむるに、すべて、蔬、おほかた見えず。  
(上一二 八頁)

(57) 此法師、信心を致して、食物をもとめて、仏師等を供養して、  
(上四五 九二頁)

(58) 「我等、宝を求ん為に出にしに、悪しき風にあひて、知らぬ世界に來たり。」(上九一 一六八頁)

例(56) (57) (58)における「茸を求む」「食物を求む」「宝を求む」は具体的な物を求める意で、いずれも実動詞用法である。

## 11、「バヤ」の用法

宇治拾遺物語に「バヤ」は一七例見られる。会話文、心話文、和歌、地の文に見られるが、主に会話文と心話文に用いられる。

(59) 「仏を作り、供養し奉らばや」といひわたりければ、  
(上一〇九 二三〇頁)

(60) 「うけ給て、説経をもせばや」といへば、(下一一〇 二三五頁)

(61) 「あはれ、走出て舞はばや」と思ふを、(上三一 一〇頁)

(62) 「これが夜のありさまを見ばや」と思ふに、(上五七 一一五頁)

(63) めぐりくる春く〜ことにさくら花いくたびちりき人に問はばや

(下一四七 三〇四頁)

例(59) (60) は会話文における用例で、「供養したい。」「説経をした  
い。」の意と解され、例(61) (62) は心話文における用例で、「舞いたい。」「  
見たい。」の意と解され、例(63) は和歌における用例で、「人に問いた  
い」の意と解され、いずれも自分が「〜したい」という意を表す。これら  
は「願望」の「表出」に当たる用例である。

(64) 「おのれも、皮をだにはがばや」と思へど、旅にてはいかゞすべきと  
思て、まもり立て侍なり」といひければ、(上九六 一八八頁)

(65) 「告げ参らせばや」と思ながら、我身かくて候つればと思候程に、  
(下一五七 三二六頁)

(66) この人を妻にせばやと、いりもみ思ければ、(上四一 八六頁)

(67) 筵、畳をとらせばやと思へども、(上一〇八 二二四頁)

例(64) (65) は会話文の従属節における用例で、「私も皮をはぎた  
いと思うけれども」、「告げたいと思ひながら」、「の意と解され、自己の  
「願望」を表す用例であるが、その「願望」を「説明」する用例である。例  
(66) (67) は地の文における用例で、「この人を妻にしたいと」、「筵と  
畳を取りたいと思うけれども」、「の意と解され、いずれも三人称を主語

にして、これらも「願望」を「説明」する用例である。

12、「(モ)ガナ」の用法

宇治拾遺物語に「(モ)ガナ」が二例見られ、ともに心話文に用いられ  
る。

(68) 「これをまろげて、みな買はん人もがな」と思て、

(上二二 四五頁)

(69) 「馬がな」と思けるほどにて、この馬を見て、

(上九六 一八九頁)

例(68) (69) は「買う人がほしい。」「馬がほしい。」の意と解され、「願  
望」を「表出」する用例である。

13、「マホシ」の用法

宇治拾遺物語に「マホシ」は四例見られる。

(70) 「さらば、参りぬべくは、いますこしも召さまほしからんほど召せ」  
といへば、(上一九 四〇頁)

(71) 「法花経のめでたく、読奉らまほしくおぼえて、俄にかく成である  
なり」と語り侍けり。(下一二三 二六五頁)

(72) このなぎは、三町斗ぞ植へたりけるに、かく食へば、いとあさま  
しく、食はんやうも見まほしくて、(上一九 四〇頁)



(73) あはぬまでも見にゆかまほしけれど、(上八七 一六〇頁)

例(70) (71) は会話文における用例で、「召し上がりたいほど」「読誦したくて」の意と解され、例(72) (73) は地の文における用例で、「見たくて」、「見に行きたかったが」、「の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用例である。

#### 四、おわりに

以上、宇治拾遺物語における希望表現の構成及び使用状況を考察した。

希望表現の構成を見ると、その構成形式が多様にわたり、主要形式の用例数も多いが、特に「〜ムト思フ」の用例数が際だって多い。

各形式の用法を見ると、「欲」は題目の漢文に用いられるものと和文の名詞用例に限られ、「〜ムト思フ」は漢文訓読の用法とは関係がなく、希望表現と未然表現の境界は必ずしもはっきりしない。「願」と「ホシ」は希望表現で心情を表す用法があるが、「望」「祈」「乞」「請」「求」「詭」は名詞用法と実動詞用法のみ見られ、希望表現の周辺的な存在といえる。

終助詞・助動詞は希望表現の重要な構成形式で、主に会話文と心話文に用いられる。「バヤ」は「願望」の「表出」と「説明」、「(モ)ガナ」は「願望」の「表出」、「マホシ」は「願望」の「説明」を表す用法が見られた。

#### 【主要参考文献】

『日本古典文学大辞典』第一巻 岩波書店 一九八三年一月二〇日第一刷

三木紀人「宇治拾遺物語の内と外 ―古本説話集にも及ぶ―」(新編日本古典文学全集42 解説) 岩波書店 一九九〇年一月二〇日第一刷 二〇一二年四月二四日第一〇刷

#### 【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告第一部第109号』平成12年3月

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を直接発する場合を希望の「表出」、それ以外の間接質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称の「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 『日本古典文学大辞典』第一巻 岩波書店 一九八三年一月二〇日第一刷

(4) 『宇治拾遺物語』 三木紀人、浅見和彦校注 岩波書店 新編日本

古典文学全集42 一九九〇年一月二〇日第一刷発行 二〇一二年  
四月二四日第一〇刷発行

(5) 柴田昭二、連仲友「十訓抄における希望表現について」『香川大学  
研究報告』第一部第142号 二〇一四年九月

(6) 注(2)参照。以下同。

(7) 注(2)参照。以下同。

(8) 注(2)参照。以下同。

(9) 注(2)参照。

(しばたししょうじ 香川大学教育学部教授)

(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇一四年一月二八日受理)